呪術としての大型将棋に関する考察

高見　友幸*，中根　康之*，木子　香**，原　久子**

Considerations for the Large Shogi Variants as Shamanism

Tomoyuki TAKAMI*, Yasuyuki NAKANE*, Kaori KISHI**, Hisako HARA**

キーワード：摩訶大将棋，大型将棋，将棋の歴史，呪術としての将棋

Abstract

Until very recently, large shogi variants ware considered shogi made after small shogi. In the conventional study of shogi history, shogi as a game was the subject of research, and shogi as shamanism was not. By the way, if the origin shogi is a magical shogi designed according to Yin Yang Five Elements and Sixty zodiac, many kinds of pieces are required. Therefore, the origin shogi should be inevitably a large shogi variant. It is possible to draw consistent answers to the unsolved problems in the history of shogi by treating the Heiankyo jobo as the square of the board of the Maka-o shogi. Among the conclusions obtained, the two major ones are as follows: 1) The board of the Maka-o shogi has 16 × 19 squares, and it is highly likely that it is not the 19 × 19 squares described in Shogi-zu. 2) For Maka-o shogi and Dai-o shogi at the time of its formation, their pieces may not have been placed in the square, but would have been placed at the intersection just like Chinese chess.

1. はじめに

平安時代から鎌倉時代にかけては，現代将棋よりもずっと駒数の多い大型将棋が存在していた．ただ，これらの大型将棋は研究の対象とされることはほとんどなく，将棋史の研究においては，大型将棋と並存していた小将棋（将棋盤：横 9 マス，駒数：36枚：平安将棋と呼ばれている）に向けられてきた 1）．古代および中世に存在した大型将棋として古文書に登場するのは，延年大将棋（横25マス，354枚），摩訶大将棋（横19マス，192枚），大大将棋（横17マス，192枚），大将棋（横15マス，130枚），中将棋（横12マス，92枚），平安大将棋（横13マス，68枚）の 6 種である．**図 1** では，このうち，摩訶大将棋，大将棋，平安大将棋の初期配置を平安将棋と比較した．

将棋は平安時代から存在した日本の伝統的遊戯であるが，その起源については全く不明である．従来は，小将棋が将棋の起源とされていたが，2013年に11世紀の酔象の駒（大型将棋に含まれる駒）が出土したことにより，その信頼性は揺らいでいる．一方で，我々の最近の研究からは，大型将棋の起源は摩訶大将棋であり，将棋は次第に小型化の方向に発展したという新しい仮説が出ている[1]．この発展過程が，二中歴に記載されている小将棋の成立にまで続いたとすれ

*　大阪電気通信大学　総合情報学部　デジタルゲーム学科
**　大阪電気通信大学　総合情報学部　ゲーム＆メディア学科

ば，つまり，**図１**のＡ→Ｂ→Ｃ→Ｄの順で将棋が発展したとすれば，将棋の起源が小将棋だとする大前提は崩れ，これまでの将棋史は根本的な見直しを迫られることになる．

本論文では，文献学や考古学の観点からではなく，将棋が遊戯であると同時に呪術であったとの仮説に則り，古代日本の大型将棋を再検討する．言うまでもなく，これまでの将棋史の学術研究においては，呪術と将棋が同じステージで議論されたことはない．呪術である故，古文書に残されることも少なく，したがって，古代の将棋に呪術の痕跡ありと認めるか否かは，あくまでも研究者の主観に負うところも大きい．しかし，将棋の持つ呪術性は，一般的に呪術という単語でくくることのできる事象に比べると，抽象性の度合いがかなり小さいと言える．それは，次節で示されるとおり，陰陽五行思想が，将棋のルールの中に具体的に目に見える形で組み込まれているからである．

本論文では，呪術としての将棋を出発点として議論を展開することで，将棋史でまだ解明されていない次の２つの問題，１）大型将棋の将棋盤のマスの数，２）原初の将棋がマス置きなのか交点置きなのかという疑問に対して一定の回答を提示したい．

					仲人								仲人					
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵
飛車	左車	横行	横飛	竪行	角行	龍馬	龍王	摩羯	奔王	鉤行	龍王	龍馬	角行	竪行	横飛	横行	右車	飛車
驢馬		桂馬		猛牛		飛龍	羅刹	力士	狛犬	金剛	夜叉	飛龍		猛牛		桂馬		驢馬
	老鼠		嗔猪		盲熊		悪狼	麒麟	師子	鳳凰	悪狼		盲熊		嗔猪		老鼠	
反車		猫叉		淮鶏		蟠蛇	猛豹	盲虎	酔象	盲虎	猛豹	臥龍		古猿		猫叉		反車
香車	土将	石将	瓦将	鉄将	銅将	銀将	金将	提婆	玉将	無明	金将	銀将	銅将	鉄将	瓦将	石将	土将	香車

A）摩訶大将棋

歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵
香車	桂馬	銀将	金将	玉将	金将	銀将	桂馬	香車

D）小将棋（平安将棋）

				仲人						仲人				
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵
飛車	飛龍	横行	竪行	角行	龍馬	龍王	奔王	龍王	龍馬	角行	竪行	横行	飛龍	飛車
	猛牛		嗔猪		悪狼	麒麟	師子	鳳凰	悪狼		嗔猪		猛牛	
反車		猫叉		猛豹		盲虎	酔象	盲虎		猛豹		猫叉		反車
香車	桂馬	石将	鉄将	銅将	銀将	金将	玉将	金将	銀将	銅将	鉄将	石将	桂馬	香車

B）大将棋

						仲人							
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵
反車	飛龍			盲虎		横行		盲虎			飛龍	反車
香車	桂馬	鉄将	銅将	銀将	金将	玉将	金将	銀将	銅将	鉄将	桂馬	香車

C）平安大将棋

図１．古代日本に存在した将棋の初期配置．本論文では，Ａの摩訶大将棋が始めに成立し，以後Ｂ→Ｃ→Ｄの順で，より小さな将棋に発展したという説を取る．従来の説はこの逆で，Ｄ→Ｃ→Ｂ→Ａの順により大きな将棋に発展したとする．

２．摩訶大将棋と陰陽五行思想

陰陽五行思想によれば，この宇宙は，木，火，土，金，水の五行で構成されている．五行のそれぞれは陰と陽に分かれ，さらに，十二支と組み合わされて六十干支を形成する．**表１**に，五行

（木・火・土・金・水）と十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸），十干と十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）の組み合わせで作られる六十干支を示した．

表 1．五行と十干と六十干支．

木		火		土		金		水	
木の兄 きのえ	木の弟 きのと	火の兄 ひのえ	火の弟 ひのと	土の兄 つちのえ	土の弟 つちのと	金の兄 かのえ	金の弟 かのと	水の兄 みずのえ	水の弟 みずのと
甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉
甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未
甲申	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳
甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯
甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑
甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥

摩訶大将棋の駒も，**表 1** と同じような構成の表を形成することができる．陰陽五行思想の五行としては，動物の歩き駒，人の歩き駒，踊り駒，走り駒，成り駒の 5 つの駒グループが対応する．それぞれの駒グループは12種の駒で構成されており，十二支の現れである．この12種の駒は，どのグループにおいても，ちょうど 6 種ずつの陰と陽の駒にきちんと分かれる．この 6 種の駒グループが十干のそれぞれに相当するのである．

陰陽への分類については，後述するが，まず，駒をどの五行に分類すればよいかということについて考える．五行への分類は，駒の機能（走り・踊り・歩き等）や名称（動物・人）に着目すれば容易である．類似した機能や名称のグループにほぼ12種の駒が集まるからである．**表 2** に，摩訶大将棋の駒の分類例を示した．12という数が複数のグループに現れるのがわかるであろう．たとえば，人の歩き駒は12種，動物の歩き駒も12種である．動物の歩き駒の成り駒も当然12種の駒として存在する．

表 2．摩訶大将棋の駒の種類．

駒種	駒数			駒種	駒数	駒名
50	96	歩き駒	人	12	38	玉将・金将・銀将・銅将・鉄将・瓦将・石将・土将・提婆・無明・仲人・歩兵
			動物	12	19	老鼠・猫又・嗔猪・淮鶏・蟠蛇・悪狼・盲熊・猛豹・盲虎・酔象・臥龍・古猿
		踊り駒		12	16	師子・狛犬・麒麟・鳳凰・力士・金剛・羅刹・夜叉・飛龍・猛牛・桂馬・驢馬
		走り駒		14	23	奔王・摩羯・鉤行・龍王・龍馬・飛車・角行・竪行・横行・反車・香車・左車・右車・横飛

我々の研究では，当初，どの駒が十二支のどの動物にあたるかという観点で，12種類のあるべき駒を選別していた．それらは，老鼠・猛牛・盲虎・驢馬・臥龍・蟠蛇・桂馬・古猿・淮鶏・悪狼・嗔猪の駒であり，羊に相当する駒はない[2]．現状では，十二支として使われている動物に個々の駒を対応させるという考え方ではなく，類似した12種類の駒グループの存在が，十二支に相当するとの見解を取っている．

表 2 における摩訶大将棋の各駒グループを，6 種ずつの陰陽に分ければ，**図 2** のような十干を抽出することができる．この陰陽の分類は，駒の動きによりなされることに注意されたい．駒の名称だけに注目する限り，陰陽の分類はむずかしい．**図 2** で，五行 1，五行 2 の部分が，たとえば，木，火に相当し，木が陰陽に分かれて，甲（きのえ），乙（きのと）等の十干のひとつとなる 2）．

駒の動きを陰陽に割り当てる際のパターンの具体例を，**図 3** に示した．●印は駒が歩く（移動する）ことのできる位置を示した．**図 2** の五行 2 のグループ（動物の歩き駒）から取り出した 4 つのペアである．蟠蛇と淮鶏，臥龍と古猿，酔象と盲虎の各ペアは，駒の動きが上下反転した形となっている．また，猫又と嗔猪は，動きが45度回転した形である．これらのペアの駒は，**図 1** の摩訶大将棋の初期配置からもわかるとおり，初期配置では隣接した位置に並んでいる．

同様に，**図 4** に，五行 1（人の歩き駒）のグループからも 4 例を取り上げた．提婆と無明は左右反転，銅将と鉄将は，真後ろへの動きの有無でペアを形成している．なお，各駒の正当な動きを認定するためには，いくつかの古文書を横断的に確認する必要がある．各古文書で駒の動きの記載の異なる場合があるからである．さて，**図 3** と**図 4** で取り上げた 8 例のペアのうち，象戯圖の摩訶大将棋の箇所の記載に誤りがあると見るべきは，蟠蛇，淮鶏，臥龍，嗔猪，提婆，無明，銀将である．このうち，蟠蛇，提婆，無明は象戯圖の延年大将棋の箇所の記述を採用した．嗔猪については，諸象戯圖式の記載を採用している．淮鶏，臥龍，銀将の動きについては，古文書にない動きであるが，動きはほぼ必然的に決定する．なぜなら，歩き駒の動きのパターンは，24パターンだけであり，他の駒の動きに変更が加わったことで，使用できるパターンは限定されるからである．こうした検討の詳細については，文献[3]を参照されたい．

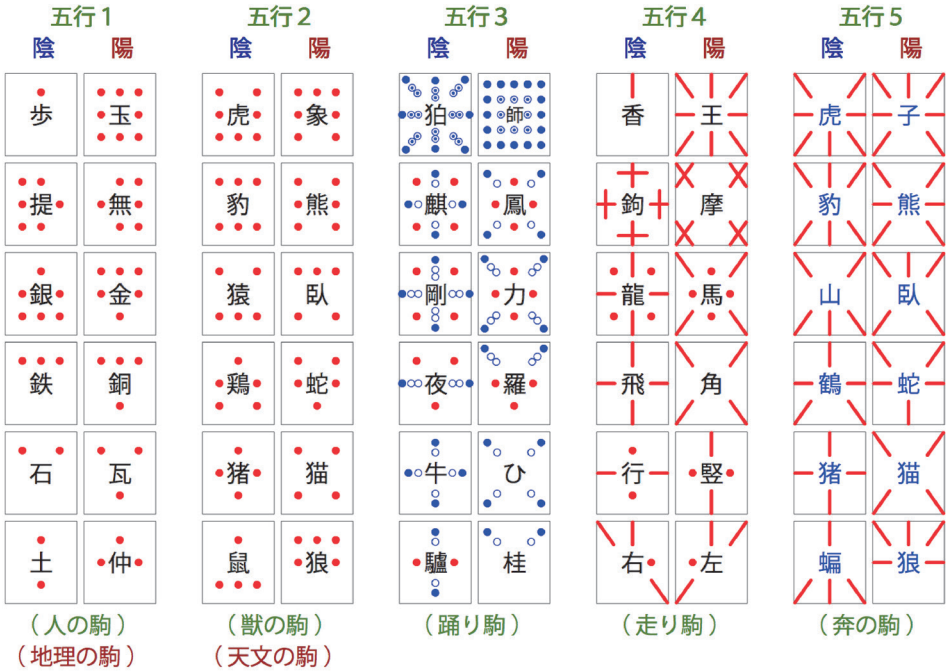

図 2．摩訶大将棋における陰陽五行の分類例．

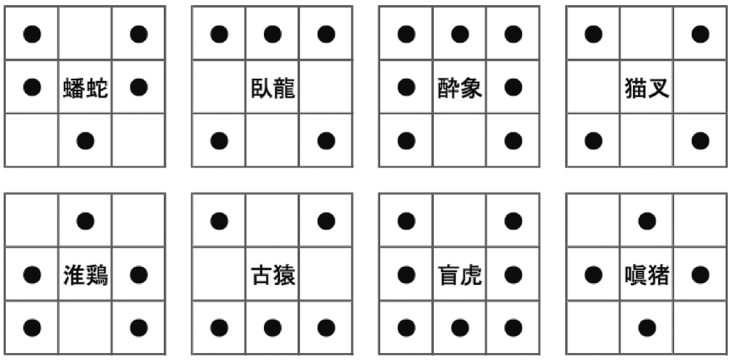

図３．駒の動きの陰陽のパターン例.

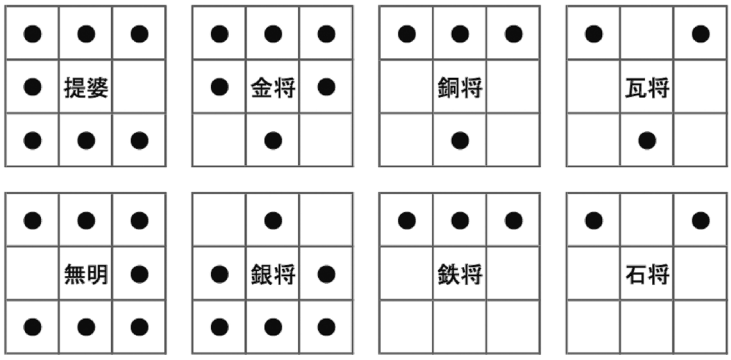

図４．駒の動きの陰陽のパターン例.

このようにして得られた駒の動きは，**図２**に示されたとおり，１）類似した特徴を持つ各グループはちょうど12種であり，２）各グループで６種ずつのペアにきちんと分かれ，３）各ペアは初期配置で隣り合うように配置されるのである．このような整然とした構成は，ある仕組まれた原理のもとで摩訶大将棋が設計されたと見るに十分である．事実，象戯圖の序文の冒頭の記述からもこの推論が間違いでないことが読み取れる．次のように書かれている．

夫象戯者周武之所造也
上観其象於天文移以日月星辰之度
下象其形於地理列以金銀鉄石之名
蓋順陰陽之本宣律呂之気

上の引用で，２行目の日月星辰は十二支の駒を，３行目の金銀鉄石は，文字どおり将の駒を表しており，**図２**の五行１と２のグループに対応する．それぞれのグループは，天文の駒，地理の駒と呼ばれ，初期配置の位置を暗示する．続く４行目は，12種の駒を６つの陰陽のペアに分けることの比喩である．律呂とは，古代中国の12音階のことであり，それは陰陽２区分，各６音階に分けられている．まさに，**図２**で示された駒の陰陽五行の分類を表現するものである．

なお，本節で述べた駒の動きで陰陽のペアを形成し，将棋の初期配置が決められている点は，摩訶大将棋だけでなく，大大将棋でも同様であることを指摘しておきたい[3].

3．平安京と大型将棋の将棋盤

前節では，摩訶大将棋の駒が，陰陽五行思想の六十干支の枠組みに則って構成されたものであろうと推論した．この推論は，同様の大型将棋である大大将棋の駒の構成についても当てはまる[3]．このように，大型将棋の駒が，陰陽五行思想に基づいて設計されたものであるとすれば，大型将棋の将棋盤もまた何らかの設計原理があるのかどうか，本節では，そのことを考察する．

図5は第2次平安京3）の条坊に大大将棋の駒を配置させたものである．**図5**は平安京の北辺から南の方向を見ている．ベージュ色は大内裏の領域を示す．平安京の坊の数（南北の道路の数）は,17であり，これがちょうど大大将棋の初期配置の横方向の駒数に一致する．したがって，大大将棋の駒を交点置きにして並べると，**図5**のとおり，きちんと平安京の東西の幅に収まることになるのである．駒が交点に並ぶ理由については，次節を参照されたい．平安京の中央にある朱雀大路には，玉将，近王，奔王，飛車，前旗の駒が並ぶ．歩兵は二条大路に並ぶことになる．

大大将棋の将の駒が並ぶ位置に注目されたい．大大将棋では，**図5**のとおり，玉将の横の左将と右将，金将，銀将，銅将が，大内裏の領域に沿って上方向に並んでいる．**図1**に示される他の大型将棋では，将の駒は最下段に並ぶが，大大将棋の将の駒は並びが特異であることに注目されたい．これは，駒の配置を大内裏の領域と対応させたことによるものであろう．

また，青龍と白虎の駒の位置にも注目されたい．**図5**からわかるとおり，青龍は東の端，白虎は西の端にあり，五行と色彩の関係に合致している．このように，青龍と白虎の駒は，大大将棋が東西方向に駒を並べる将棋であることを示しているのである．青龍の横にはやはり青い色の香象が並び，白虎の横にも白象が並ぶという配置となっている．

平安京との対応は，摩訶大将棋の将棋盤にも見られる（**図6**）．大大将棋の場合，駒は条坊の交点に置かれ，東西の方向に並べられた．摩訶大将棋の場合は，交点ではなく，条坊の中に置かれる．第2次平安京は，南北に19保，東西に16保の大きさである（一保は一辺の長さ2町の正方形）．条坊に囲まれた一保の領域を将棋盤の1マスとすれば，平安京は南北方向に19マス，東西方向に16マスの将棋盤に相当する．こうして，**図6**のとおり，摩訶大将棋の駒は南北方向に並べるときちんと収まってしまうのである．

図6の場合，摩訶大将棋の敵味方の歩兵の間隔が4マスとなることに注意されたい．これは，世界の他の大型将棋の場合と同じである．たとえば，ペルシアのTamerlane Chess（横11マス・縦10マス）や，ドイツのCourier Chess（横12マス・縦8マス），スペインのGrant Acedrex（横12マス・縦12マス）は，どれも，歩兵相当の駒が，敵味方間でちょうど4マスの間隔で向かい合う．歩兵の駒の間隔が4マスというのは，世界の大型将棋における当時の標準ルールだったという可能性もあり得るであろう．

図5や**図6**のように，平安京と大型将棋の将棋盤がきれいな対応を見せることは，平安京が陰陽道に基づいて作られていることを考えると，さほど不思議なことではない．前節で見たとおり，大型将棋の駒は陰陽五行思想に則っているからである．つまり，大型将棋は，盤も駒も，将棋全体が陰陽道や陰陽五行思想と関係する呪術的な要素を本来的にもつ将棋なのであろう．

4．拡張された平安京と摩訶大将棋

前節では，平安京の条坊と大型将棋の将棋盤のマス目の数がきちんと対応していることを確認

した．しかし，摩訶大将棋の駒はマスの中に置かれるのに対し，大大将棋の駒は交点に置かれる．この不一致は，同時代の将棋である限り，いかにも不自然に見える．本節ではこの点について考える．結論を先に書けば，この不自然さは，平安京の広さが変わったことが原因である．

平安京の条坊は，当初は，大内裏が南北方向に2町だけ狭かったとする説がある[4]．当初の平安京（第1次平安京）は，9世紀半ばに拡張されたらしい（第2次平安京）．大内裏の北の端までを平安京とすると，第1次平安京は，南北方向に18保であるが，第2次平安京は南北方向に19保となっている．

図7と**図8**に，第1次平安京の条坊と大大将棋および摩訶大将棋の対応を示した．**図5**と**図7**の比較からわかるとおり，第2次平安京（**図5**）は大内裏が南北方向に5保，第1次平安京（**図7**）は南北方向に4保の大きさとなっている．第1次平安京では，中御門大路と一条大路の距離が目の数でひとつだけ近づいている．このため，**図7**では，前旗の駒が，大内裏の南端の中央，朱雀大路にある朱雀門の位置とちょうど重なることになる．大大将棋の駒の初期配置と平安京の条坊は，さらによい対応を見せるのである．

一方，摩訶大将棋の場合を考えると，将棋盤である平安京が南北方向に1マス分小さくなったため，横19個の駒すべてをマスに置くことができなくなった．初期配置を同じに保ったままで，駒を並べるにはどうしたらよいか．それは，駒を大大将棋のときのように交点に置けば解決するのである．摩訶大将棋の駒を交点に置いたようすを**図8**に示した．

結局，**図7**と**図8**に示されるとおり，当初の平安京では，摩訶大将棋も大大将棋も駒は交点に置かれていたと考えればよい．その後，南北方向に1保（1マス）分だけ拡張された第2次平安京が作られる．平安京の大きさが変わったからと言って，その平安京と対応している将棋盤までを変える必要はないのであるが，日本古代の将棋については，どうもそうではなかったらしい．平安京と将棋盤を同じにするというのは，確固とした設計思想なのであり，平安京が変われば，将棋盤も変える必要があった．もし，駒の並びを変更せずに，全部をそのまま使う場合，交点に置いたのでは，将棋盤は1路だけ余る．しかし，交点に置くのではなく，マスの中に置けば，きちんと収めることができるということに注意されたい．このようにして，交点置きだった将棋は，マスの中に置く将棋へと変わったという説明は可能であろう．ただし，その将棋は，将棋盤が平安京の条坊と密接な関係をもつ呪術としての将棋でなければならない．その将棋には，将棋盤と平安京の条坊との対応を断ち切ることのできない深い理由がなければならないのである．このように，大型将棋は遊戯と呪術が融合したものであっただろうと思われる．このことは，将棋の駒に陰陽五行思想が仕組まれていることからも納得ができよう．

ところで，象戯圖の摩訶大将棋口伝の箇所をあらためて読んでみると，そこに書かれている将棋は，そもそも交点置きでなければならないことに気づかされる．たとえば，一目歩ク，一目二目ヲバ踊ラズ，三目踊ル等の表現に注目されたい．目というのは，縦横に引かれた線の交点のことを言う．こうした表現は，摩訶大将棋が，駒を目に置く将棋だったことを示す名残りなのかも知れない．この箇所にはかなり古い時代の，摩訶大将棋が交点置きだった時代の記述が，なお残されたままだったのではないだろうか．

同じことは，二中歴の記述にも見つけることができる．金将不行下二目や入敵三目皆成金等の表現で，目という語句を使っているのである．我々は，将棋の駒が交点置きだとは思っていないため，目をマスの意味として無意識に読み替えているのである．

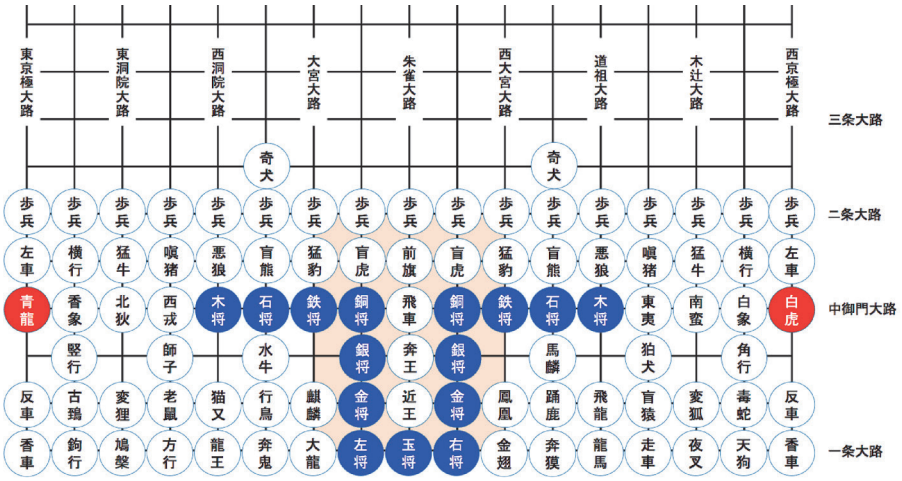

図５．第２次平安京の条坊と大大将棋の初期配置.

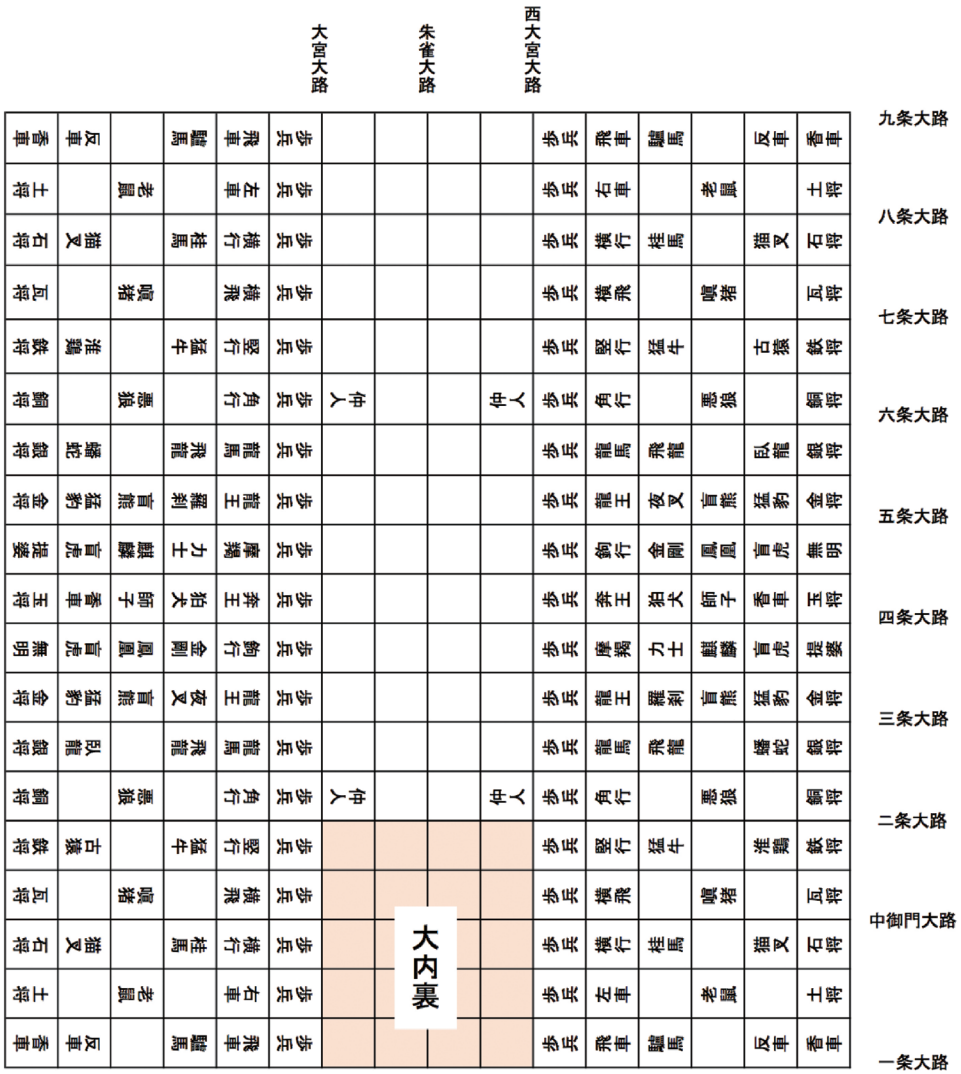

図６．第２次平安京の条坊と摩訶大将棋の初期配置.

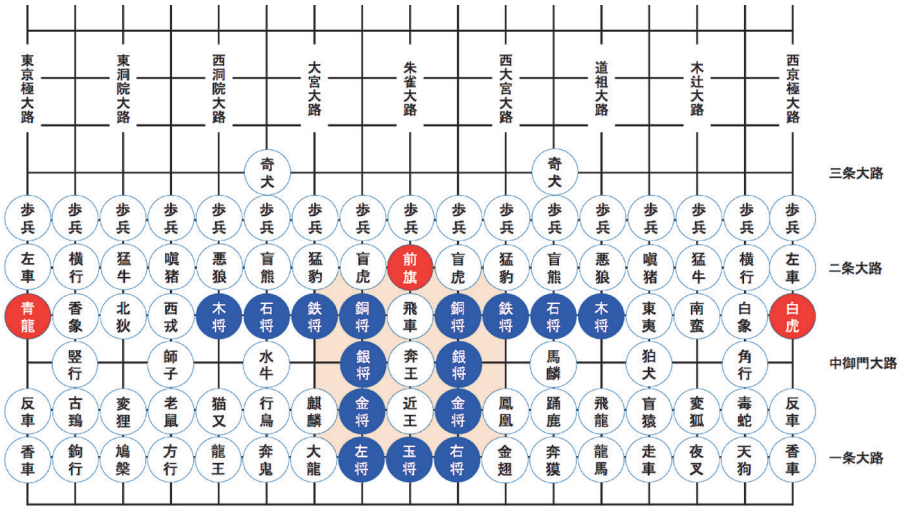

図７．第１次平安京の条坊と大大将棋の初期配置.

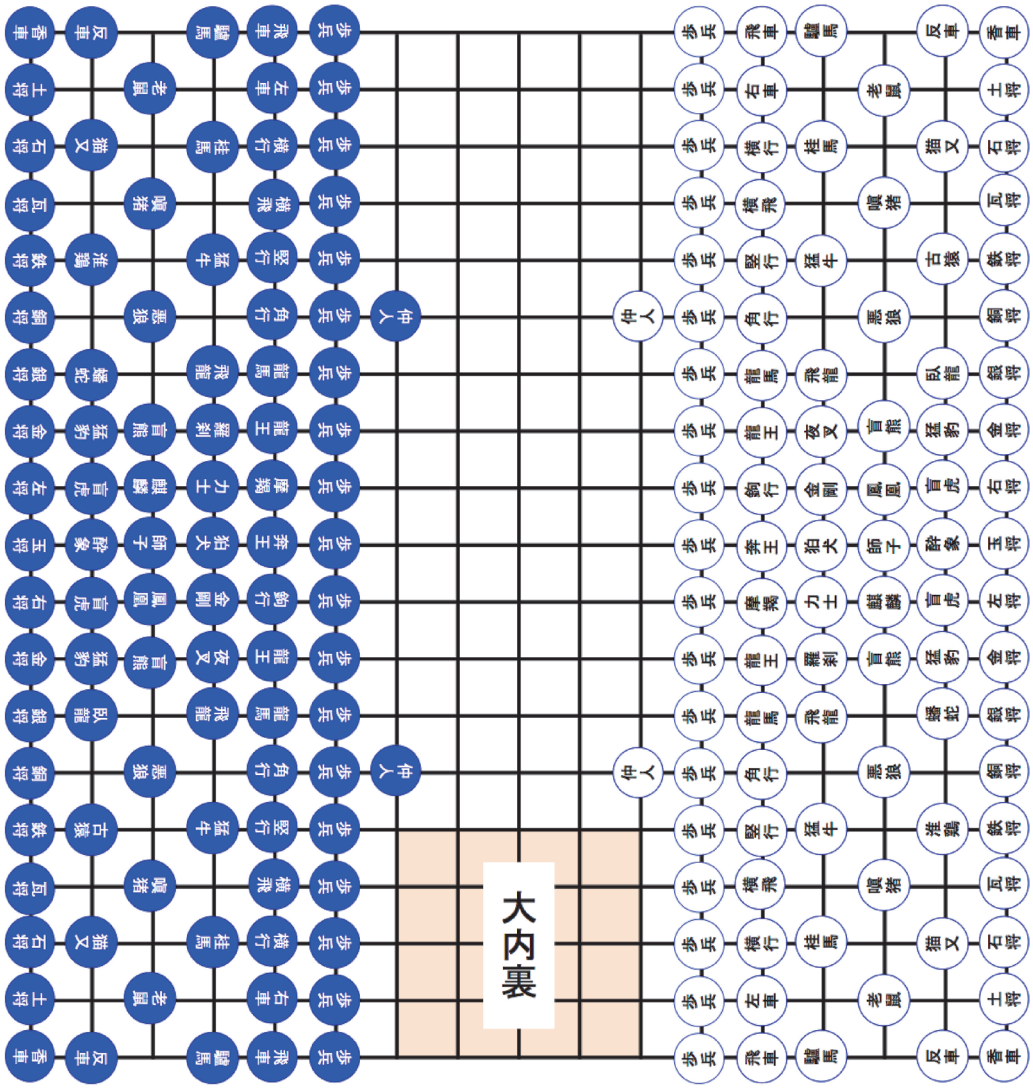

図８．第１次平安京の条坊と摩訶大将棋の初期配置.

5．将棋の駒が交点置きだった可能性

ここまでの議論では，平安京の建設当初，摩訶大将棋と大大将棋の駒が交点置きであったとするひと続きの推論を提起した．この推論は，大型将棋の駒が陰陽五行思想に則って設計されていることを拠り所にし，大型将棋の将棋盤が平安京の条坊と一致するという仮説から導かれている．

ここで注意すべき点は，現代の将棋では，駒はマスの中に置かれており，大型将棋の駒が交点置きだったとする仮説とは一致しないという点である．ところで，シャンチー（中国の将棋）の駒は交点に置かれている．仮に，大型将棋が中国からの伝来と考えた場合，その駒が交点に置かれていることはむしろ自然なことのように思われる．本節では，大型将棋の駒が交点に置かれていた可能性を，古文書の解読から検証する．

図 9 は，諸象戯圖式に記載されている各大型将棋の見出し部分だけを抜き出して集めたものである．盤の縦横の数を記述している箇所に注目されたい．大大将棋は十七目と書かれているが，それ以外の将棋では，たとえば，摩訶大将棋が十九間，大将棋が十五間，中将棋が十二間と書かれている．大大将棋だけが「目」という表現，他の将棋には「間」という表現が使われている．目というのは，縦横に引かれた線の交点の部分のことであり，間というのは，駒を置くマスのことを言い表したのであろう．この表現は，大大将棋だけが，駒を目のところに置く将棋であったことを示しているのではないだろうか．この点を，以下のようにして確認した．

図 9．諸象戯圖式より各大型将棋の見出し欄を編集.

大大将棋が縦横各17目であるとする表現には注意を要する．他の将棋には「間」と表現されており，17目が17間の誤写だと見ることもできるからである．記述どおり17目だとすれば，マスの数は16，17目が17間ということであれば，マスの数は17となる．

１マスの幅が将棋の種類によらず同じだとしよう．この場合，盤の幅は，各将棋が使うマスの数に比例する．**図10**のグラフで，この比例関係を確認した．**表 3** は，グラフに用いた数値データであり，**図 9** に示した諸象戯圖式の記述から抜き出されている．**図10**の左図は，大大将棋のマスの数を16とした場合（17目とみた場合：駒は交点に置かれる），**図10**の右図は大大将棋のマスの数を17とした場合（17目が17間の誤写だとした場合：駒はマスの中に置かれる）を示す．左図では，盤の幅が各将棋のマスの数ときれいな比例関係を示している．マスの数を17とした場合（右図）は，この比例関係が大大将棋のプロットのところで乱れることに注意されたい．この結果から，大大将棋の盤は，マスの数が16であることがわかる．大大将棋は横に17枚の駒が並ぶので，駒は交点に置かれていたということになる．

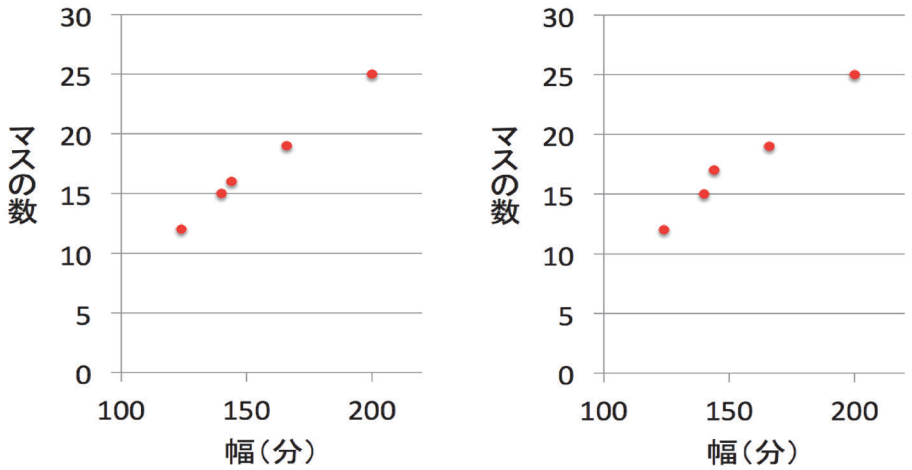

図 10．大型将棋のマスの数と盤の幅．左）大大将棋を横 17 目とした場合，右）大大将棋を横 17 間とした場合．

表 3．大型将棋のマスの数と盤の幅．幅は諸象戯圖式に記載のデータを用いた．.jpg

	幅（分）	マスの数
中将棋	124	12
大将棋	140	15
大大将棋	144	16／17
摩訶大将棋	166	19
延年大将棋	200	25

7．まとめ

ごく最近までは，大型将棋は小将棋よりも後で作られた将棋だと考えられてきた．また，従来の将棋史の研究では，遊戯としての将棋が研究対象であり，呪術としての将棋が研究対象となることはなかった．ところで，起源の将棋が陰陽五行と十干十二支に則って設計された呪術の将棋であるとするならば，多数の駒種が必要とされる．したがって，起源の将棋は必然的に大型将棋にならざ

るを得ない．摩訶大将棋が将棋の起源だとする考え方は，むしろ自然だとも言えるであろう．

平安京の条坊を摩訶大将棋の将棋盤のマスに見立てることで，将棋史の未解決問題に対して，整合性ある回答を導くことができる．得られた結論のうち，大きなものは次の２点である．１）摩訶大将棋の将棋盤は縦16マス横19マスであり，象戯圖に記載されている縦横19マスではない可能性が高い４），２）成立当初の摩訶大将棋と大大将棋は，駒はマスの中に置くのではなく，シャンチーと同じように交点置きだった可能性がある．

謝辞

摩訶大将棋の復刻の過程において，本学デジタルゲーム学科高見研究室諸氏には，遊戯ルールに関する議論を重ねていただきました．摩訶大将棋の呪術の駒製作では，本学先端マルチメディア合同研究所（JIAMS）の造形スタジオを使用させていただきました．また，論文査読者には非常に貴重なコメントをいただきました．深く感謝いたします．

本研究の一部は，中山隼雄科学技術文化財団の平成30年度助成研究Ｂを受けて行われました．

注記

１）小将棋のサイズについては，８×８マス（駒数32枚），９×９マス（駒数36枚）等いくつかの説があるが，ここでは，９×９マス（駒数36枚）として話を進める．本論文で取り扱う論点への影響はない．

２）図２の表組みは，全部で48種類の駒で構成される．このため，摩訶大将棋の50種類の駒のうち，瓦将と横飛が使われていない．ここで示したのは，あくまでも一例であり，当時，どのように割り当てられていたかは知るべくもない．ともかくも，このような分類のもとで，将棋の駒に六十干支が組み込まれたと見る考え方は十分にあり得るであろう．

３）平安京は９世紀半ばに２町だけ北側に拡張されたとする説がある．ここでは，南北に大路ひとつ分だけ狭い拡張前の平安京を第１次平安京，拡張後の平安京を第２次平安京と呼ぶ．

４）摩訶大将棋の将棋盤のマスの数については，象戯圖と同じ記述の古文書が多い．しかし，田中賢一氏所蔵の江戸時代の古文書「摩訶大将棋之圖」には，摩訶大将棋の将棋盤の記述として，向17目・横19目という記述がある．これは第１次平安京の条坊と一致しており興味深い．

引用文献

[1] 高見友幸，中根康之，原久子，大型将棋の成立順に関する考察，映情学技報，Vol.40，No.11，AIT2016-86，147-150，2016.

[2] 高見友幸，中根康之，原久子，摩訶大将棋の復刻，大阪電気通信大学人間科学研究，Vol.19，pp.63-80，2017.

[3] 高見友幸，摩訶大将棋の復刻 〜古代日本の大型将棋に関する考察〜，大阪商業大学アミューズメント産業研究所，研究叢書第19巻，2019.

[4] 瀧浪貞子，平安建都（集英社版日本の歴史５），集英社，1991.